

## “水馬の卵”見たことがありますか

森本静子

(ひとはく地域研究員、NPO 法人シニア自然大学校水生生物科)

水馬って何？

今年の干支は馬ですね、水生昆虫にも漢字で書くと水馬と書く虫がいます。語源は分かりませんがアメンボ類のことで。アメンボは捕まえると甘い飴のようなにおいがするので飴ン坊と呼ばれるようになり、アメンボとなったそうです。カワグモと言われる地域もあるそうです。水生昆虫といってもアメンボは、水中ではなく池やおだやかな流れの川、プールなどの水面で落ちてきた虫などの体液を吸って生活しています。目につきやすい、なじみの深い水生昆虫ではないでしょうか。

水に浸かっている植物を引き上げてみると

写真のように、池に倒れ込んでいる植物を引き上げてみるとアメンボや、ほかの水生昆虫の卵、また水の中の生き物がくっついて見られます。水面生活のアメンボですが、産卵時には、雌は水中から突き出した植物などにつかまり、はうようにして水中に潜って、つかまっている植物の葉や茎の表面に卵を産み付けます。

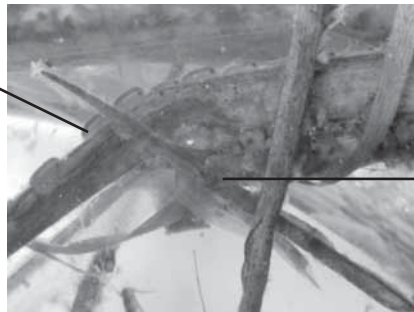


池に倒れ込んでいる植物の茎

水馬の卵（アメンボの卵）



アメンボのなかまの卵



水に浸かっていた植物の茎



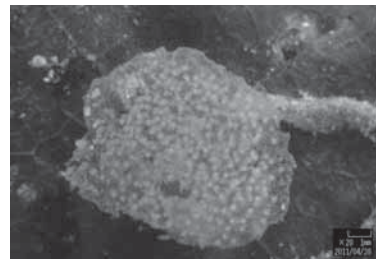
コケムシのなかま

ほかの水生昆虫の卵

持ち帰った水草などを実体顕微鏡で覗いていると水生昆虫の卵を見つけることがあります。その卵をシャーレなどに入れておくと割に簡単に孵化します。孵った幼虫を見ると何の卵なのか、おおよその見当は付きます。でも種を見極めるには成虫まで、あるいは、幼虫でもある程度の大きさまで飼育する必要がありますが、餌の調達が難しく、今のところ、アメンボ類でも2回目の脱皮までしか飼育できていないのが残念です。もっと飼育方法を工夫してみたいと思っています。



コミズムシの卵



オナシカワゲラ科のなかまの卵

参考資料：小田英智・中谷健一，アメンボ観察辞典・自然観察辞典，42，偕成社，東京